

- 2073 飛火野耀『UFOと猫とゲームの規則』（角川書店、1991年、角川文庫）

「不思議の国のアリス」とナカノ氏が助け舟を出した。
「そうそう、その中にチェシャ猫というのが出てくるだろう？ 猫のないニヤニヤ笑いというやつさ。あれがあんまり気に入ったものでね、借りることにしたんだ。」

p. 253

- 2074 朝永振一郎「光子の裁判 ある日の夢」（朝永振一郎『鏡の中の物理学』（講談社、1976年、講談社学術文庫）p. 78-120）

ずい分と長い、ややこしい夢からさめた私は、不思議の国の夢からさめたアリスのように、しばらくそのまま呆然としていました。

p. 120

- 2075 野阿梓「眼狩都市」（野阿梓『花狩人』（早川書房、1984年、ハヤカワ文庫J A）p. 171-291）

狂茶党（マッド・ティー・パーティ）はそうした反帝勢力の一つであり、革命的秘密結社として過激な地下闘争をくりひろげる最も先鋭な集団であった。

p. 175

- 2076 野阿梓『武装音楽祭』（早川書房、1984年、ハヤカワ文庫J A）

「学生共と一緒に日時計の下なんかで何をやっているのだ、レモン」嘲けるようにハラムがいった。
「菓をつくっていたのさ」レモンは投げやりに応えた。「僕はしならかなトーヴなんだ」

p. 206

- 2077 橋本治『雨の温州蜜柑姫』（講談社、1990年）

花の時期は終わって、ここにはもう緑と金色しかないけれども、ここは緑の『不思議の国のアリス』の世界だと、醒井凉子はあきれて思った。

p. 139

- 2078 堀晃『マッド・サイエンス入門』（新潮社、1986年、新潮文庫）

キャロルの『鏡の国のアリス』の有名な文句——きっと鏡の国のミルクはおいしくないわよ——が実際に生じてくる訳だ。

p. 111

- 2079 堀淳一『エントロピーとは何か 「でたらめ」の効用』（講談社、1979年、ブルーバックス）

なお、下記の引用で言及されている 図 8.4 の、より「不思議さの少ない『不思議の国のアリス』」（p. 189）の冒頭部分は、筒井康隆・柳瀬尚紀『突然変異幻語対談』（朝日出版社、1988年、Lecture Books；河出書房新社、1993年、河出文